

教祖御誕生二百年の意義深い年の秋季大祭を前に、本日、真柱継承奉告祭を執り行い、門出の誓いを新たにすることはこの上ない喜びである。ここに思うところを述べて、教祖がおつけ下され、歴代真柱を志として布き弘められた道をしつかりと受け継ぎ、一層の進展と充実を期して勤め切る決意を共にしたい。立教の本旨は、「このたび、世界一れつをたすけるために天降った」と仰せられるように、世界中の人間を余すことなくたすけ上げることにある。その思召を体して世界たすけに向かうことこそ、この道を信ずる者の第一の務めである。

いまでハせかいちううハ一れつに めゑくしやんをしてわいれども (十二 89)

なさないとのよにしやんしたとても 人をたすける心ないので (十二 90)

これから八月日たのみや一れつわ 心しいかりいれかゑてくれ (十二 91)

この心どふゆう事であるならば せかいたすける一ちよばかりを (十二 92)

このさきハせかいちううハ一れつに よろづたがいにたすけするなら (十二 93)

月日にもその心をばうけとりて どんなたすけもするとおもゑよ (十二 94)

と仰せ下さる。人をたすける心は、何よりも親神様の思召しに適う誠真実である。教祖は、このたすけ一条の道の上につとめとさづけを教え、また、自ら身を以てひながたをお示し下されたばかりでなく、今もなお、存命のお働きを以て私たちをお導き下されている。

よふぼくは先ず、日々、月々のおつとめにをやの理を戴き、また、病む人に進んでおさづけを取り次ぐとともに、常に原典に親しみ、をやの思いを求めて、教えに基づく生き方を心掛けよう。日々に頂く十全なる御守護への感謝は、自ずと報恩のひのきしんとなり、人だすけの実践と現れる。その日常は巧まずして傍々を照らし、土地所に成程の理を映す。世界は未だ争いの絶え間なく、飽くなき欲望は生命の母体である自然環境をも危うくして、人類の未来を閉ざしかねない。人々は、我さえ良くばの風潮に流れ、また、夫婦、親子の絆の弱まりは社会の基盤を揺るがしている。まさに今日ほど、世界が確かな抛り所を必要としている時はない。

今こそ人々に元なるをやを知らしめ、親心の真実と人間生活の目標を示し、慎みとたすけ合いの精神を広めて、世の立て替えを図るべき時である。

よふぼくお互いは、その使命を自覚し、勇気を奮って人々の心の扉をたたき、心の闇を開くべく努力を傾けよう。をやの声を聞き、天理に目覚めて心を入れ替える時、人は生きながらにして生まれ変わる。さらに進んでは、共々に人だすけに努め、互いに手を携えて世界のふしんに勤しむまでに導く。これぞ教祖の道具衆としての至上の任務であり、無上の喜びである。

世に先んじてだめの御教えに引き寄せられた道の子一同は、

一れつにはやくたすけをいそぐから せかいのこたろもいさめかけ (よろづよ 8)

とのお急き込みに応え、逡巡を去り胸を張って、をやの声を伝え、自らも勇み、世界を勇ませて、神人和楽の陽気世界の建設に力を尽そう。

この門出の句を吉祥として心機を一転し、全よふぼくが相呼応して世に働きかける時、世界は救われ、必ずや一れつの陽気ぐらしは実現されるものと信ずる。

ここに全教一手一つの奮起と実動を要望し、御存命の教祖のお導きを願ひ奉る。

立教百六十一年十月二十五日

真柱 中山善司